

第十四方面軍將校特使としてピナバガンに来る。終戦の命令書を発表。

八月十三日、ピナバガン出発ジョネス・エチャギにて米第三十七師団による武装解除（屈辱の時）後、マニラからカランバの大収容所に移送された。この時に戦中に捕虜となった男達が十分な肥満体で我々に指図していた。不可解な心情だった。

数少ない戦友ともここで分散された。一部は北サン方面に、また一部はマニラ近郊に。私はロスバニオス付近でPWとして労役に服し、昭和二十二年新春に名古屋港に上陸し復員事務完了で長船へ帰った。

帰郷後は一生懸命働き、第二国道沿いの家屋と隣接の田畑五反歩を処分し、神戸に出て商業一筋に働き、子供もそれぞれ家庭を持ち、これで自分の役目は終わったと思った時に「阪神・淡路大震災」に見舞われた。

老骨に鞭打って今再建したところである。はじめに申した如く、私の今日あるのは戦死された戦友のお陰とご加護があったからだと思っている。合掌。

【参 考】

米軍戦記（故・中原清重氏訳文）

第二十五師団・第三十五師団・ルソンゲリラ軍他

師団部隊 日本軍殺敵確認数 一四、五六九人

戦場捕虜数 六一四人

鉄兵団・平林克己参謀

総員 二一、七二七人

戦没者 一八、七二六人

生還者 三、〇〇一人

私の従軍談 南溟放浪記

島根県 竹田 登美

（旧姓 園山）

私は大正十一年十一月十八日、島根県で生まれました。

昭和十八年四月十日、現役兵として広島第五部隊第二中隊（戦車隊）へ入隊しました。

入営当時の私の家庭は、父が村の助役兼農業を営んでおり、養蚕を大規模に、蚕は春、夏、秋、梅雨と年四回で家中蚕棚で、夜は蚕棚の下で寝る始末でした。父のほか、母・長兄・次兄・姉・私・弟という家族構成でした。

私は故郷の農業学校を卒業後、島根県庁へ就職し、林道の測量、設計を行っていました。昭和十七年十一月、県庁を退職して村へ帰り青年団へ入り体を鍛えました。農業学校では剣道を学んだ関係か、在郷軍人会の銃剣術の稽古に励み、軍人会のチームの一員となり優勝したことも懐かしく思い出されます。これは後日入営後役に立ちました。寒稽古もよく励みました。

農業学校（五年制）三年生の時、満州の開拓団に入るべくその支度中の昭和十三年、次兄の戦死により父がショックに陥り嘆きがひどいので、私は開拓団入りをやめて父母の悲しみをやわらげるよう努め卒業しました。

昭和十八年四月十日の入営に際し、その前日私の村では四人の若者（一部召集兵もいた）が入隊で、農業

学校卒業のせいか私が代表で挨拶をしました。ちょうど珍しく雪が降って気温も下がり、手の指が凍えて自由にならなかったのを思い出します。戦車隊は私一人で他はすべて浜田の第二十一連隊へ行きました。その日は広島市内の旅館へ前泊、当日部隊の下士官に引率されて衛門を通りました。

部隊は戦車隊とは言え、前身は騎兵連隊で現在は捜索連隊となり、戦車は一番小さい四トンくらい、四人乗りで戦車長、運転手、射手、無線係でした。戦車に乗る機会はめったになく、三八式の短銃を持ち歩兵と同じ教育訓練を受けました。

ある夜、酒に酔った曹長が突然「整列」と号令をかけて初年兵を営庭へ引っ張り出し戦車に乗り組ませ、練兵場へ行き前進行動中戦車壕へ車の前部を突っ込み、バックしても壕より脱出できず、隊へ連絡して下士官、占兵の応援によりやっとのことで正常な状態になりましたが、新兵はビンタのお叱りでした。初年兵係の教官、助教、助手をさしおいて、しかも夜間飲酒しての暴挙であり、制裁されるのは曹長であるべきは

ず、逆に新兵に当たるとはと軍の不合理を考えさせられる悪い思い出がありました。

戦車に乗る訓練はしばらく無くて、固定したトラックの運転席でクラッチ、アクセル、ブレーキの操作と、いわゆる模擬運転の教育が続ききました。まだ訓練も充分と思われないのに、三カ月はアッと言う間に過ぎて新兵は南方へと旅立ちました。私は幹候受験者として少数の仲間と残留でした。受験は不合格で、十一月に南方へ転属命令が出て夏服を支給され、将来の不安な南進に心を痛めたことです。しかし戦局は不利な展開で船がなく、毎日海を眺めての待機が続きました。

昭和十九年二月、やっと乗船、十七隻の船団を組み宇品港出帆。実際に兵員を乗せている船は一隻のみ。他の十六隻はすべて空船。敵潜攻撃をかわず窮余の策でしょうか。玄界灘では波が荒く他船のスクリーンが空回りするのが見受けられました。長崎県で九州の部隊が乗船してきました。船倉内の棚は超満員となり、悪臭と高温と湿度に悩まされつつ、何日もかかって台

湾へたどり着きました。この間風がわき始めて困りました。

台湾到着前夜「ドゥースーン」と船体に大きな衝撃があり、「敵潜の魚雷！」と全員パニックとなりましたが、「敵の魚雷でない！ 僚船の衝突だ。損害は軽い、落ち着け、騒ぐな！」とのことで大事に至らず胸をなでおろしたこともありました。

やがて高雄に着き船の修理に五日間。上陸は無し。船内で風つぶしと銃の手入れでした。船内の高温多湿で銃にサビが多発するのです。

やがて船は高雄発マニラへ。約一週間いました。次はハルマヘラ島へ。船内に五日間ぐらいました。この島の付近の海域は、敵潜の出没がはげしく危険千万で止むを得ずの滞留とのこと。

三月五日、セラム島（豪北方面分散基地）アンボンへ上陸。船団を解く。各部隊より迎えの将校が来てそれぞれ隊へ配属。ここでは召集兵と一緒に約二〇人が船待ちのため使役作業や、約二キロ離れた山頂で高射砲陣地の構築に従事。陣地より兵舎への帰路は必ず

激しいスコールにあい、全身ビショぬれで帰隊すると裸になり着衣を乾燥させました。

A型バラチフスが多発しました。私は他隊の患者の看護をさせられているうちに、私自身がバラチフスに感染入院しました。毎日何十回の下痢と四〇度近い高熱が一カ月続き、その間ほとんど飲まず食わず。よく生き残ったものと思議な気がします。私が看護した兵が窓の外を通るのを見ても、声をかける体力もありませんでした。

続いてマラリアにもやられました。初めは三日熱、そのうち熱帯熱となります。毎日昼過ぎると体に震えがくるので、戦友数人で毛布数枚を巻いて押さえ込みます。そのうち熱発するのです。二つの病気で約二カ月入院しました。退院して谷川で体を洗い頭も洗いましたが、頭髮が全部抜けてしまい丸禿げとなり、しばらくは放心状態で過ごしました。戦友には冷やかされるし辛い毎日でした。平成の今は年なみに生え揃っています。まさに悪い夢でした。

かれこれするうちに、南の島セラムのアンボンへ移

り、「原隊を追及せよ」との命により独り身の単行動になりました。これからしばらくの間困ったことは、給与通帳がないので全然給料が入らず、身の回りの物を一つ一つ売り食いで凌いだことです。金が無いほど辛いことはありません。

原隊は、アンボンより更に南のバンダ海に浮かぶカイ諸島に第五師団司令部がいるとの由。アンボンで便船を待つがなかなかなく、やっと船が来ました。愛媛県宇和島市に籍のある「宇和島丸」という四〇〇トンくらいの小船です。乗船者は将校以下七〇人くらいの混合隊。退院者、出張者等々。航程一昼夜の予定で機関銃射撃経験者をはじめ各種の部、役に適任者を選び分担を決めました。

ちょうど中間ぐらいの海上で敵機に捕まり、機銃掃射を受けました。甲板上は危ないので船内へ退避しましたが、敵弾は甲板を撃ち抜いて船内に来ます。残念にも死亡数人、負傷数人の損害。この空襲戦闘が従軍中の私の唯一の戦闘経験となりました。

最寄りの島に部隊がいるのを認め、島へ船を近寄せ

るが接岸出来ぬ地形のため、ボートを降ろして死者負傷者を数回に分けて島へ送ることになりました。その時私も、元気な者と共に自分の荷物を船に残してボートの操作をしました。上陸して負傷者は病院へ、死亡兵は林の中で煙を出さぬよう火葬します。煙を出すと敵機の空襲がひどいのです。運の悪いことは重なるのか、その夜荷物を残した「宇和島丸」が敵機の爆撃で沈没する始末。数少ない身の回りの品は全部船と共に海没。着たきり雀となりました。

ほうほうの態でやつのこと第五師団司令部へ着きました。ここで中隊のいる島を知らされ船待ちしながら使役させられました。その時炊事へ来いと言われ、毎日の空腹との戦いも、ああ、これで助かったので。腹いっぱい食ってやるぞと内心大喜び。しかし炊事での任務は毎日師団長閣下の風呂桶の水汲みとは！水汲みは戦友と二人で島の谷底にある井戸で水を汲み、その水桶を二人で担いで坂を登り風呂桶へ。薬ではありませんが、敵弾の心配なし。約一カ月ぐらいの期間炊事で世話になりました。

いよいよ中隊へ復帰の時が来ました。司令部のあるカイ諸島より更にまた南西のタンニバル諸島です。ダイハツに乗り込み昼は鳥陰にひそみ夜だけ走りまわりました。小島つたいに走り、何倍もの日数を費やして到着。中隊はジャングルの向こうにあり、密林の迷路の踏破を要します。幸運にも迷わず夜になって中隊へたどり着きました。なんと宇品を出てちょうど一年ぶりです。顔見知りの戦友がびつくりしながら、無事中隊復帰を喜んでくれ、「上官への申告は明日に延ばして今夜はここへ寝よ」と親切にしてくれました。翌朝申告を終えてやっと部隊の一員となり安心をしました。嬉しかったものです。

中隊に在る間、敵機の爆撃を数回受けましたが中隊には何一つ被害はなく、遙か離れた海軍の基地がやられたとのことでしたが、詳細は不明です。次に困ったのは皮膚に出来る潰瘍です。皮膚が腐り穴があいてジクジクと汁が出ます。体に何カ所も出るのですが、この地方の風土病か？ 私も足に数カ所出来ましたが幸い治りました。今でもその痕がはつきり

と分かります。

原住民も背中や手足を患い、衛生兵に消毒の上リバノールをしてもらうのをよく見かけました。

この島では漁労班が編成され食料の自給に励みました。班員は曹長以下四人。私も指名されました。中隊を出て海岸に小屋を建て、ナマコを獲り乾燥させて加工保存食として中隊へ送ります。時には爆発を利用して魚をたくさん獲り、燻製に加工して中隊へ送りました。

戦後の二十一年六月十日、復員して知ったのですが、母は死亡していました。ちょうど私がタンニバルの漁労班にいた折のこと。一夜に二回同じ状況で母が夢に出ました。見馴れた着物を着てうつむいた姿勢で枕元に立ったのです。何にも言わず障子をあけて外へ消えました。その時は大して気にも留めなかったのですが、母は死の直前まで私のことを心配して、「手紙は来ぬか、来ぬか」と言い続けていたとのことで、母の霊が会いに来たのだと今更に母の慈愛に涙止まらな

い毎日です。不思議にも夢を見た日時が母の死とほとんど同じでした。

悲痛な事故、自爆もありました。同年兵にAという戦友がいました。幹候不合格組の一員で、平生より坊ちゃん育ちでした。食事当番で食缶を担ってジャングルの中を、炊事から中隊へ帰る途中、空腹に負けてちよつとつまみ食いをしたところを古兵に見られました。以後中隊内で食べ物の関係でトラブルがあると常にAが疑われて、毎日仲の良い戦友Mに辛さを打ち明けていたそうですが、ついにAはMに謎めいた言葉を残して手榴弾自決を遂げたのです。軍隊生活の最も陰惨な事件で、同年兵の私共もAのため、父母その他肉親のため、心よりの追悼の念を捧げるばかりです。

島には土民の村が五つあり、村長が親日家の村では日本兵を大事にし、子供が兵舎へ遊びに来ることしばしばでした。私の中隊の村の村長も大した親日家で食料の補充、慰安、教育等にも協力度が大きく、隊も助かりました。

その頃私は中隊長、二人の曹長の当番を三人で命ぜ

られて別棟におり、至らぬながらも懸命に頑張りました。よく考えると一般中隊員よりは大分楽をさせてもらったと思います。人の嫌がる当番勤務。やり遂げて相手に気に入ってもらうことこそ因果応報。情けは人の為ならずでしょうか。

とにかく私の従軍は南溟の放浪で、ニューギニアとセレベスに囲まれた海域バンド海に点在する各諸島を遍歴し、その間豪北方面部隊鯉部隊（第五師団）の各部隊をたらい回しに配属され、本来の任務である戦車部隊員としての戦闘は全くありませんでした。それどころか南溟の洋上を海軍よろしく島から島へとさまよう間、常に空腹に困らされる毎日でした。食料を得るため、漁労班で海産物を作り、農兵として来る日も来る日も野菜作り、芋作り、南瓜作り等に励んだ毎日。あの戦争は我々にどんな意義、教訓、思い出をもたせてくれたのか？ 米英蘭支露を相手の戦争強行、焼土抗戦、一億特攻、無条件降伏を歴史家は如何に受け取るのでしょうか。

遮莫（さもあらばあれ）、若い血潮を燃やして尽忠報国に邁進した我等生き残りの兵―老兵は骨身に徹して味わった戦陣の労苦を風化さすことなく、語り部の一人として後世に伝える責務を完遂し、日本国家の安寧、大和民族の弥栄、世界平和への寄与を念じてこの労苦調査に協力しました。

最後に青春の歳月を捧げた豪北方面部隊に、数々の思い出深いあの島この島を船のデッキで遠く近くに望んで別れを惜しみ、豪北カイ諸島トール港を米船に乗り出発、海路恙なく和歌山県田辺港へ帰還。時に昭和二十一年六月でした。

字品を出て中隊追及まで一年。トールを出て田辺港まで十日。この長短の日時は何を物語るのか？

無事懐かしの故郷の家へ戻りました。父は涙を流さんばかり喜びましたが、母は既に亡くなり、思えばタンニバルで母と夢で相見たのが今生の別れでした。私の帰宅後二カ月遅れて長兄も満州より復員。夢のような幸せでした。

復員後、村役場に勤めながら村の青年団長（団員二

五〇人）に推され、消防団員にも参加しました。昭和二十五年二月結婚、旧姓園山より養子に行き竹田へと改姓しました。その後男児が誕生し人生の階段を上がり、かたや恩欠者出雲市役員として会員の願望実現、亡き戦友の冥福を祈って老妻と感謝の毎日を過ごしております。

私の従軍記を総括するに、最も強く印象に残る労苦は空腹に困ったこと。病気よりも空襲の銃撃よりも、空腹に悩んだことが最大の労苦でした。終戦復員後、現在の平和で豊かな環境の日本で空腹のことを申しても、皆さん特に若い人には充分理解認識してもらえないと思いますが、空腹とは栄養失調、疾病、挙動不自由、行軍不能を招く諸悪の根源であることを強調しておきます。

中隊では、一番若い自分でしたが、弾丸の中をくぐり抜けて来た古い兵隊も同じ労苦を味わいながら、いたわってくれたことへの感謝の念は忘れることが出来ません。